

2018 年度活動報告 日本語教育基礎・日本語教育基礎演習

藤原 由紀子（関西学院大学日本語教育センター）

1. 授業の目的

本科目は、グローバルスタディーズ科目¹として日本語教育センターが開講するものである。そこで、日本語教育基礎では、授業を通して、①日本語を外国語として見つめ直す ②初級学習者向けの活動を考え実施する ③自分自身の日本語を振り返る、という3つの場を提供し、履修者がこれまでとは違った観点に立って、日本語や日本語によるコミュニケーションを見つめ直すことを後押しする。これにより、日本語教育についての基礎的な知識を学ぶとともに、多文化共生社会における自己のあり方、今後どのような日本語の使用者でありたいかについて考える機会を提供することを目的としている。

日本語教育基礎演習は、日本語教育基礎で学んだことを踏まえ、実際に教案作成や模擬授業を行い、将来、国内の地域日本語教室や留学先の日本語授業などで、TA やボランティアとして活躍できるような、より実践的な日本語教育能力の養成を目指すものである。

2. 授業概要

2.1. 日本語教育基礎

春学期は上ヶ原キャンパスで2クラス（履修者合計34名）、秋学期は上ヶ原キャンパスと三田キャンパスで、それぞれ1クラスずつ開講した（履修者合計68名）。

授業は、教員による講義とグループ・ディスカッションを平行して行う形で進め、履修者が受身で講義を聞くだけでなく、自分自身で考えることにより、自ら気づきを得ることができるよう工夫した。また、グループ活動を数多く取り入れることによって、社会人基礎力である「発信力」「傾聴力」「協働する力」の養成を目指した。

授業内の活動として、グループごとに、日本語初級学習者向けの比較的短時間でできる学習活動（以下、ミニ活動）を考え、実施することを2回行った。1回目のミニ活動では、履修者が互いに実施者と学習者になり、両方の役割を交替で体験していただくことにより、日本語を教える立場と日本語を学ぶ立場、両者の視点から活動や日本語を見る機会を提供した。活動後には、活動中の発話を録音したものを文字に起こし、語彙や表現の難しさの観点から分析することによって、自らの日本語を客観的に振り返る機会を設

¹ 多文化共生社会の実現に貢献する世界市民となるために、異文化への理解を深めるとともに、グローバルな視点でものを見つめることのできる力を身につけ、日本人としてのアイデンティティの確立をサポートするという目的で設置されている全学科目。

けた。2回目のミニ活動では、交換留学生に学習者役として授業に参加してもらい、実際の初級レベルの日本語学習者（交換留学生）に対して、活動を実施してみるということを行った。2回目の活動後にも、自らの話し方をさらに多様な観点から、客観的に振り返る活動を行った。

2.2. 日本語教育基礎演習

日本語教育基礎演習は、日本語教育基礎を既に履修した学生を対象に開講している。春学期（履修者合計4名）、秋学期（履修者合計4名）それぞれ1クラス、上ヶ原キャンパスで開講した。

今年度は、初級教材の分析や例文の検討などを行った上で、模擬授業を3回実施した。春学期、秋学期とも非常に少人数のクラスであったため、履修者同士が打ち解けるのも早く、和気藹々とした雰囲気であった。グループによる模擬授業の準備なども互いに協力し合いながら、非常に良い雰囲気の中で進められていたのではないと思う。履修者には、模擬授業ごとに気づきや反省点をまとめたコメントシートの提出を課し、それに対して教員がフィードバックを行うことで、次回の授業がより良いものとなるよう、改善に繋げた。また、今年度は交換留学生の日本語学習プログラムと連携し、初級授業の見学も実施した。

3. 成果と今後の課題

今年度の大きな成果として、交換プログラムとの連携が挙げられる。日本語教育基礎では、ボランティアとして日本語初級レベルの交換留学生に、実際に授業に参加してもらうことができた。今回、交換留学生には、履修者らが考えたミニ活動の学習者として参加してもらったが、期末レポートの記述からも、履修者にとって非常に良い刺激となったことが覗えた。

日本語教育基礎演習では、交換プログラムのコーディネーターおよび授業担当教員の協力のおかげで、授業時間内に、実際の初級授業見学の機会を設けることができた。授業見学によって得られた気づきには、教師の授業のやり方に関するもの他に、学習者に関するものも多く見られた。

「キャンパスにいる留学生とほとんど交流がない」との声が履修者から度々聞かれることは、これまでの活動報告でも述べている。日本語教育に興味を持ち、授業を履修している学生ですら、日本語学習者との接触は少なく、交流に興味はあっても、なかなか一步を踏み出せずにいる。実際、本授業の課題をきっかけに、初めてグローバルラウンジに足を踏み入れ、留学生に話しかけてみたというような声も聞かれる。今後も授業の中に、積極的に両者の接点を作ることにより、互いに学び合える場と、その最初の一步を提供していきたい。